

女子体操競技採点規則の変遷と日本の採点指針についての一考察 — 2013年版から2017年版を中心とした跳馬の採点に着目して —

A thought about the transition of the female gymnastics rules and Japan's scoring — From 2013 to 2017, you're going to focus on the vault —

尾 西 奈 美

Nami ONISHI

I. 緒 論

体操競技は、技の難しさ、ダイナミックさ、美しさ、安定性などを複数の審判員が採点をおこなひ、得点を算出し、順位を競い合う競技である。得点は、DスコアとEスコアの合計得点から算出される。Dスコア (Difficulty Judge : D審判員) とは、Difficulty = 技の難度を表し上限がない。現在はA~J難度まであり、演技構成の難しさを評価するものである。Eスコア (Execution Judge : E審判員) とは、Execution = 技の完成度を表し、10点満点から減点方式で採点がおこなわれる。難度の高い技を実施しても完成度が低ければEスコアでの減点が大きくなり、逆に難度を落として完成度だけを高めてもDスコアの評価が低くなる。上位で戦うためにはDスコアとEスコアの両立が必要となる。

近年、女子体操競技は演技全体を通して、更に芸術性と多様性に富んだ演技が求められるようになった。国際体操連盟 (FIG) が制定する採点規則に基づいて、技の難易度・美しさ・雄大さ・安定性・熟練性などの観点から、より高度な技の技

術と芸術性が強く求められている。むやみに高難度の技を実施しても、体操競技の本質である美しさや雄大さが伴わない演技に対して、実施減点が課せられることになり、その結果、高得点を獲得することは出来ない。選手は自身の能力に合わせ、正確に、より美しく、より雄大に実施することが求められている。女子体操競技は、様々な要素が必要不可欠で、特に芸術性での評価は高く求められており、適切に組み立てられた構成を、選手の演技力によって芸術的に表現することが要求されている。

通常、体操競技の採点規則はオリンピックの翌年に4年サイクルで改訂が行われており、2009年2月に2012年のロンドンオリンピックに向けて2009年版の採点規則が発行され、2013年は2016年のリオデジャネイロオリンピックに向けて2016年版、続いて2020年東京オリンピックに向けての2020年版と改訂された。今年度は改訂の年であったが、オリンピックが開催されなかったことにより、現行のままのルールでの適応となった。

この4年サイクルの採点規則にはどのような変化が生じたのか、今後、女子体操競技に求められる

ものは何か、これまで男子採点規則に関する研究は数多く行われてはいるものの女子についての研究は少ない。

そこで本研究は女子採点規則における改訂内容の変遷、女子競技を構成する4種目（跳馬、段違い平行棒、平均台、ゆか）の1種目目である跳馬を中心に、今後の動向と採点指針を探ることを目的とした。

Ⅱ. 日本の採点方針について

採点の基本方針について、2017年版として施行された採点規則には「演技の内容や組立に関する現在の考え方はダンス系やアクロバット系の振り付けが熟知され、それが重要とされる芸術的な演技を奨励する」と記載されており、この内容は2021年まで一貫している。体操競技は技の難しさと美しさを競うスポーツである。女子体操界では技術の革新や新技に重きを置いた時期もあったが、2009年より施行された採点規則からは熟練された芸術性と多様性に富んだ演技を高く評価する方針を打ち出している。

また、以下の3項目を採点上の最重要項目として採点される。

- ・欠点のない美しい姿勢での正確な技の実施
- ・安定感のある技の実施による完成度の高い演

技

- ・すべての技の実施において、着地の先取りができた高い体勢での安定した着地

Ⅲ. 跳馬の規則と採点方法

1) 一般的な規則

選手は跳躍を開始する前に実施予定の跳躍技番号を表示し演技を開始する。演技は助走から始まり、跳躍板での両足踏み切りは「前向き」または「後ろ向き」で行なわなければならない。跳躍は着手前の空中局面（第1空中局面）・支持局面・着手後の空中局面（第2空中局面）・そして着地局面について採点が行われる。すべての跳躍は跳躍台に両手をついて実施されなければならない。選手が跳躍板、または跳躍台に触れていなければ要求されている跳躍回数に対して2013年までは減点なしに1回のみ追加の跳躍が認められたが、2017年より、1.00の減点を伴って2回目の跳躍が許される。3回目の助走は認められなくなった。これらの規則は2013年版より一貫して同じ内容が適用されていたが、ルール改正により過失の減点がより厳しくなっていることが示されている。

2) 跳躍技グループについて

跳躍技は表1の通りグループ1から5（以下G1

表1 跳躍技の分類

| グループ | 跳 躍 の 種 類 |
|------|---|
| G1 | 第1/第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない、宙返りのない跳躍技（倒立回転とび、ヤマシタとび、ロンダート入り） |
| G2 | 第1空中局面で1回（360°）ひねりを伴うまたは伴わない前方倒立回転とび～第2空中局面でひねりを伴うまたは伴わない前方または後方宙返り* |
| G3 | 第1空中局面で1/4～1/2（90°～180°）ひねりを伴う倒立回転とび（ツカハラ）～第2空中局面でひねりを伴うまたは伴わない後方宙返り |
| G4 | ロンダートから第1空中局面で後ろとび1回（360°）ひねりを伴うまたは伴わない（ユルチェンコ）～第2空中局面でひねりを伴うまたは伴わない後方宙返り |
| G5 | ロンダートから第1空中局面で後ろとび1/2（180°）ひねりを伴う入り～第2空中局面でひねりを伴うまたは伴わない前方宙返りまたは後方宙返り |

*:2009年版より後方宙返り系もG2に加えられた。

～G5) に分類されており、2009年版において若干の追加事項が生じているがそれ以降の変更はない。(表1) G1は「第1／第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない宙返りのない跳躍技(倒立回転とび、ヤマシタとび、ロンダート入り)」、G2は「第1空中局面で1回ひねりを伴う、または伴わない前方倒立回転とび～第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない前方宙返り」、G3は「第1空中局面で1/4～1/2ひねりを伴う倒立回転とび(ツカハラ)～第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない前方宙返り」、G4は「ロンダートから第1空中局面で後ろとび1回ひねりを伴う、または伴わない入り(ユルチェンコ)～第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない後方宙返り」、G5は「ロンダートから後ろとび1/2ひねりを伴う入り～第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない前方宙返り」となっている。このグループのG2とG5に2009年からは後方宙返りの技が追加された。これは「前転とび～1/2ひねり後方かかえ込み宙返り」と「前転とび～1/2ひねり後方屈身宙返り」というクエルボ系の技が難度表に復活した事によるものである。

3) 採点方法について

跳馬のDスコアは他の種目とは違い、すでに技ごとに最低2.00点(前転とび)から6.40点(前転とび～前方かかえ込み2回宙返り・ロンダート後方1/2～前方身伸2回ひねり)までの価値点が定められており、その価値点が直接Dスコアとなる。2016年までは、最低2.40点(前転とび)から7.10点(前転とび～前方かかえ込み2回宙返り)と、現在は技の難度に対して、価値点が下がっている。このことから日本の強化指針として、Dスコア5.40以上の技は必須で積極的にD5.60～6.00の技に取り組む高いDスコアの跳躍技を推奨しつつも、美しい姿勢と正確性で完成度の高い跳躍を掲げていることが示されている。

D審判団は実施された跳躍技の価値を種目特有な減点とともに判断し、そのスコアを確定する。

また、E審判団は実施された跳躍から種目特有の実施減点を行い、減点後のスコアを算出する。この2つのスコアの合計が演技を行った選手のスコアである。これらの内容も2013年版施行時から一貫している。

IV. 跳馬に求められる要求について

- 1) 予選(競技Ⅰ)、団体決勝(競技Ⅳ)及び個人総合決勝(競技Ⅱ)における跳躍は1回のみであり、その予選における跳躍スコアは団体決勝と個人総合決勝へのスコアとなる。しかし1回をみの跳躍では、選手は安定性を求め、または安全対策の一つとして難度を下げた技で実施することが多く見受けられる。また、選手が競技Ⅰで種目別決勝(競技Ⅲ)への出場を望む場合、競技Ⅲの規則に従って2回の跳躍を実施しその平均点が最終スコアとなる。

その実施は支持局面(跳躍台からの突き手)が重視され、2回の跳躍が異なるグループ、第2空中局面が異ならなければならない。これには跳躍を実施する選手の技の偏りを無くし、より多様でバリエーション豊富な技を実施させようとする目的があると考えられる。

また、2017年より無効となる跳躍について跳躍台を足で押し返す、または跳躍とは認められない未完成な実施が追加された。体操競技の採点は、全て規則集に掲載されている技を組み合わせ実施しなければならないので、未完成の跳躍に関しては無効という判断を下すことになる。(表2)

- 2) 跳馬特有な減点については、競技Ⅲにおける特有な要求として「2回の跳躍における支持局面が異ならなければならない」という条件以外は施行当初からの変更は行われていない。(2009～) 全ての跳躍技には跳躍の

表2 無効となる跳躍

| 区分 | 無効(0.00)となる跳躍 |
|---------------|--|
| 2013～ (継続) | <ul style="list-style-type: none"> - 助走をして、とび越すことなく跳躍板や跳躍台に触れる - 跳躍台に触れない実施 - 跳躍中のすべての補助行為 - ロンダート入りの跳躍技でセーフティーカラーの使用違反 - 足から先に着地をしない |
| 2017～ (追加) | -承認されない不十分な実施、または跳躍台を足で蹴っての実施 |

番号が付けられており、選手は演技を行う前にその跳躍技番号を審判に表示する。もし、表示と異なる跳躍技を実施した場合でも、D審判団が判断をし、減点はない。2013年までは表示を行わず実施に至った場合、その跳躍の最終スコアから-0.30点、また、片手だけ触れて跳躍を実施しなかった場合は-2.00点の減点があったことから、審判団の的確な技の承認が必要であり、スコアに対しての責任と演技を正確に判断することが要求される。

実施減点は「小欠点-0.10点」、「中欠点-0.30点」、「大欠点-0.50点」でカウントされる。(表3) この減点は特に第2空中局面での高さ不十分であり、より高さのある跳躍を求められていることを意味している。ここではE審判団が10点の持ち点から演技者の実施減点を算出していく。第1空中局面における大きな変更項目はひねり不足についてであるが、現在では跳躍グループごとに減点対象となる角度と減点が細かく分けられているのが特徴である。支持局面については2017年版から「規定された宙返りやひねりの時期が早すぎる」という項目の減点が-0.30までとなった。ひねりと同様に宙返りの開始時期にも現実性が求められている。次に、第2空中局面についてであるが、2017年版よりダイナミックで高さを重視した項目が新たに登場した。しかし、身体の姿勢や着地の飛距離に

ついては一貫して厳しい採点姿勢が採られている。また一般的な減点項目では、スピードや迫力のある演技が重視されており、高さのある第2空中局面から確実な回転での宙返り～着地を要求するものとして設けられた減点項目であると考えられる。

V. ま と め

本研究では、ルール改定に基づき2013年版採点規則と2017年版新採点規則を比較し、どのような演技が求められているのか、また、今後に求められるものは何かを分析し、採点規則における改定内容の変遷とともに女子の跳馬に焦点を当ててみた。

女子体操競技に求められる採点側の要求は益々のレベルアップを続けている。ますます新技が増え、容易な技は価値点が下がり、技は時代に伴い凄まじく進化している。

また、観客を魅了する一方、空間や高さが必要でとなる分、着地の衝撃が大きく、タイミングが合わなければ危険で、怪我のリスクが高くなることが懸念される。

女子は1928年にオランダで開催されたアムステルダム大会へのエキジビション参加から約90年、その間には、ソビエト連邦(現ロシア)の洗練された優雅さと表現力が世界を圧倒した1950年代から70年代が存在し、70年代後半からはルーマニアのナディア・コマネチを代表とする確実

表3 実施減点の比較

| 区 分 | 第一空中局面(ひねり不足) |
|---------------|--|
| 2013～ (継続) | - ひねりが不十分(-0.10・-0.30) |
| | - ひねりが不十分($(\leq 45^{\circ} : -0.10, \leq 90^{\circ} : -0.30, > 90^{\circ} : -0.50)$) |
| 2017～ (修正) | - ひねりが不十分 |
| | G3の1/4～1/2[$90^{\circ} \sim 180^{\circ}$]ひねり($\leq 45^{\circ} : -0.10$) |
| | G1, 5の1/2[180°]ひねり($\leq 45^{\circ} : -0.10, \leq 90^{\circ} : -0.30$) |
| | G1, 2, 4の1回ひねり($\leq 45^{\circ} : -0.10, \leq 90^{\circ} : -0.30, > 90^{\circ} : -0.50$) |
| 2017～ (修正) | - 3/4(270°)ひねりを伴うグループ4(-0.10→-0.30) |

| 区 分 | 第一空中局面(技術不良) |
|---------------|------------------------------|
| 2013～ (継続) | - 腰の曲がり[腰角度](-0.10・-0.30) |
| | - 身体の反り(-0.10・-0.30) |
| | - 脚の開き[または膝の開き](-0.10・-0.30) |
| | - 膝の曲がり(-0.10・-0.50) |

| 区 分 | 支持局面(技術不良等) |
|---------------|-------------------------------------|
| 2013～ (継続) | - 前向き入りでの着手のずれ(-0.10・-0.30) |
| | - 腰角度の不良(-0.10・-0.30) |
| | - 鉛直面を経過しない(-0.10・-0.30) |
| | - 腕の曲がり(-0.10・-0.50) |
| 2017～ (修正) | - 規定された宙返りやひねりの時期が早すぎる(-0.10→-0.30) |

| 区 分 | 第2空中局面 |
|---------------|---|
| 2013～ (継続) | - 膝の曲がり(-0.10・-0.30・-0.50) |
| | - 脚の開き[または膝の開き](-0.10・-0.30) |
| | - 身体の伸ばしが不十分または遅い[かかえ込み, 屈身の跳躍技](-0.10・-0.30) |
| | - 高さが不十分(-0.10・-0.30・-0.50) |
| | - ひねりが不正確(-0.10) |
| | - 伸身姿勢を保てない(-0.10・-0.30) |
| 2017～ (追加) | - かかえ込み, 屈身, 伸身姿勢が不正確(-0.10・-0.30) |
| | - 直線方向から外れる(-0.10) |
| | - ダイナミックさに欠ける(-0.10・-0.3) |

| 区 分 | 着 地 |
|---------------|-----------------------|
| 2013～ (継続) | - 距離が不十分(-0.10・-0.30) |

| 区 分 | 一 般 |
|---------------|-------------------------------------|
| 2013～ (継続) | - スピードや迫力に欠ける(-0.10～-0.50) |
| | - 足から先に着地した場合(跳躍技とみなす) |
| | - 足から先に着地しない場合(スコア0.00) |
| | - 宙返りの回転不足[転倒なし](-0.10) [転倒](-0.30) |

な技と美しさ、そして1984年に開催されたロスアンジェルスオリンピック以後はアメリカのメアリー・レットンを代表とするパワー溢れる体操が世界を支配した。その後も更に進化は進み、2016年リオジャネイロオリンピック女子4冠のアメリカ・シモン・バイルズが圧倒的な強さを打ち出している。現在においてはパワーに溢れながらも完成された正確な技・単発で行う技よりも連続で行う技・女性らしい美しさや芸術性は勿論のこと、質の高い演技が強く求められている傾向にある。これは選手らが開発し続ける高度な技術と美しさ、それに伴って開発され続ける新しい器具・改訂される採点規則、全ての相乗効果の結果であると考えられる。

技においても男子と同様に、またはそれ以上のスピードとパワー・完璧な技術と安定性・技の大きさと滞空時間・そして飛距離を追求していかねば残念ながら今の採点規則では得点には結びつかないし今後もこの傾向は続くと考えられる。

現在、女子の難度表には「前転とび～前方かかえ込み2回宙返り」があるもののこの技に挑戦する選手は殆どいない。第2空中局面から着地に至るまでの姿勢減点が大いことによるものであると考える。ひねり系の技は2 1/2ひねりが最高難度である。男子の難度表には第2空中局面での3回ひねり、あるいは3 1/2ひねりの技が承認されている。男子の技術に近づくのもそう遠くはないだろう。

今後、さらに演技における熟練性と独創性を表現することが体操競技の魅力と素晴らしさに繋がっていき、新しい技や組み合わせは限りなく創り出されていくことが期待される。

本研究は、令和2年度国士舘大学体育学部附属体育研究所研究助成金を受けて実施した。

記して感謝の意を表したい。

今年度は新型コロナウイルス感染症の世界的影響を受け、2020東京オリンピック・パラリンピックが延期されることとなり、日本の各種スポー

ツ界に於いても多くの競技会等が中止や延期となった。一日も早く新型コロナウイルス感染症の終息を願いたい。

引用・参考文献

- 1) 加納實：木下紘一郎，原田睦巳（2009）：採点規則の改訂に伴う平行棒の演技構成に関する一考察。順天堂大学スポーツ健康科学研究13
- 2) 公益財団法人日本体操協会：採点規則女子2017年版 広研印刷株式会社
- 3) 公益財団法人日本体操協会：採点規則男子2017年版 広研印刷株式会社
- 4) 財団法人日本体操協会：採点規則女子2006年版。あかつき印刷株式会社
- 5) 財団法人日本体操協会：採点規則女子2007年版。広研印刷株式会社
- 6) 財団法人日本体操協会：採点規則女子2009年版。日本印刷株式会社
- 7) 大門信吾（2001）：男子体操競技における加点に関する採点規則の改正点と最近の演技傾向－あん馬、鉄棒について－ 富山国際大学人文社会学部紀要，1 117-126
- 8) 田口晴康，豊村伊一郎，柳浩二郎（2006）：体操競技における男子跳馬の世界的動向について－メルボルン世界選手権大会を中心に－。福岡大学スポーツ科学研究，36（2）1-13.
- 9) 藤本俊，清水紀人，岡村輝一，岡崎秀人，新井重信，斉藤瑞穂，日向小百合（2003）：女子体操競技における採点規則と演技構成の検討－世界と日本の平均台の動向について－，日本体育学会第54回大会号549.
- 10) 水島宏一：日本体操の現状と課題 世界の体操競技の課題 日本体操競技・器械運動学会16号 P.49